

墓壁画等にみる土器生産 —古代エジプトの場合—

近藤二郎

The Pictorial Sources of Pottery Production in Ancient Egypt

Jiro KONDO

古代エジプトの土器生産に関する図像資料は数多く残されており、最古の資料は、古王国第4王朝時代にまで遡ることができる。図像資料からだけで土器生産活動を復元することは、文字による説明がない場合は極めて困難である。もちろん、これらの資料は、西アジアの都市出現期とは、時代的にも大きくかけ離れており、当該時期の土器生産の様相を直接的に検証するものではない。そこで、本稿では古代エジプトに残存する壁画資料等を土器生産のプロセスにあわせて概観することで、古代における土器生産を具体的にイメージすることを目的としている。

キーワード：古代エジプト、土器生産、図像資料、壁画、模型

There are a number of pictorial records concerning the manufacture of pottery in ancient Egypt. The oldest record of pottery fabrication can be traced back to the fourth dynasty of the Old Kingdom. The difficulty of interpreting pictorial sources such as wall paintings of tombs is due to the lack of accompanying texts explaining the activity. In this report I would like to offer the concrete images of ancient pottery production by overviewing the manufacturing process recorded on the wall paintings and other illustrated materials.

Key-words : ancient Egypt, pottery production, pictorial records, wall paintings, models

はじめに

西アジアにおいては、新石器時代初期に土器が出現している。その後、都市出現期になり土器生産に大きな転機が訪れたことが予想されている。その主たる変化は、土器生産の専業化という点にあると考えられている。都市の出現が、大量生産を含む土器生産に大きな変化を生じさせたことは、想像に難くないであろう。多くの遺跡から出土した土器生産に関連する遺物を通して、その変化を具体的な形で理解することは決して容易なことではない。

一方、西アジアに隣接するエジプトにおいては比較的初期から豊富な壁画資料が残されており、その中には土器の生産に直接関わる壁画も含まれている。現在、私たちが利用できる古代エジプトの墓に描かれた壁画資料は、最も古いもので古王国第4王朝時代（紀元前2590～2455年頃）¹⁾にまで遡ることができる。土器生産を描いた墓内壁画や神殿のレリーフなどは、その後も中王国時代（紀元前2045～1795年頃）を経て、新王国時代（紀元前1550～1070年頃）から末期王朝時代（紀元前664～330年）、ピトレマイオス朝時代（紀元前305～30年）さらにはローマ支配時代（紀元前

30～紀元後395年）に至るまで連続的に存在している。これらの資料は、西アジア地域の都市出現期とは、時代的にも大きくかけ離れており、当該時期の土器生産の実態を直接的に検証するものではない。そこで、本報告ではナイル川流域に残存する壁画資料等を概観することで、古代における土器生産の変遷を具体的な形でイメージすることを目的としている。

エジプトにおける土器生産を表現した図像資料

古代エジプトに残存する図像資料には、墓内部に描かれた壁画の他に、古王国時代の墓に副葬された石灰岩製の召使いの彫像、古王国時代末期から中王国時代にかけて製作された土器工房を表した木製模型、中王国時代のエジプト中部のバニー・ハサン (Bani Hasan) やアル＝ベルシャ (al-Bersha) などに位置する岩窟墓のレリーフ、新王国時代のテーベ (Thebes) 西岸の岩窟墓の壁画そしてギリシア・ローマ時代の神殿のレリーフなど多岐にわたっている。

図像資料を使用して古代の土器生産活動を復元する際に、最も困難な点は、多くの図像がヒエログリフなどの文



字による説明文が添えられていないため、実際に土器作りのために粘土をこねているのか、あるいは、パン焼きをするために粉を練っているのか区別がつかない場合が存在することがあげられる。また、古代エジプト美術の表現上の特徴から、壁画等に表現されている土器生産に従事している人物の手が右手なのか左手なのか決定できない場合もあり、図像資料だけを使用して古代エジプトの土器作り職人たちの動作までを正確に復元することは不可能なこともあるので注意を要する。

R. Holthoer は、これらの図像資料を概括することで、古代エジプトにおける土器生産の変遷をまとめている (Holthoer 1977)。本報告でも、この Holthoer の研究に準拠する形で古代エジプトの土器生産の様相を項目ごとに紹介していきたい。

粘土の調整

まず最初に、土器の胎土となる粘土の準備と調整を取上

げよう。古代エジプトにおいて、土器作りに使用する粘土には大きく異なるタイプのものが 2 種類存在している (近藤 1989a)。最も一般的に使われた「ナイル・シルト粘土 (Nile silt clay)」は、ナイル川が氾濫する毎年夏に上流から運ばれた肥沃な堆積土であり、川岸や耕地に存在する粘土である。ナイル・シルト粘土は、エジプト全土に存在しており、非常に可塑性に優れており、シリカや酸化鉄の成分が豊富な粘土である。そのため、この粘土を使用して製作した素焼きの土器は、酸化焼成することにより色調が赤褐色を呈する。2 番目のものは「マール粘土 (Marl clay)」と呼ばれるものである。この粘土は、ナイル・シルト粘土とは異なり、低位の砂漠の耕地際の縁辺部や、砂漠との境界に位置する耕地の地下部、あるいはワーディ (涸谷) に沿って流され堆積したものなどがある。マール粘土は、調整する前までは、まるで石のように堅い性質を持っている。そして、マール粘土には高濃度の炭酸カルシウムが含有されている。このためマール粘土で製作された土器を酸化焼成すると、その色調はナイル・シルト粘土で焼いたものと異なり、淡黄色から緑白色を呈するのである (Hope 1987: 10)。

古代の壁画等には土器作りのための粘土を調整していると考えられる場面が数多く出現している。これらは、古王国時代から新王国時代にかけて土器作りの過程を示す一場面として、しばしば登場している。前述した 2 種類の粘土の差は、図像資料からでは残念ながら区別することはできない。次に具体的に幾つかの例について見ていくことにしよう。

中部エジプトのメイル (Meir) に位置する古王国第 6 王朝時代 (紀元前 2300~2165 年頃) のペピ・アンク・ヒル・イブ (Pepy-ankh-hir-ib) のレリーフには、男が座って粘土塊とみられるものを手にとって叩きつけている様子が描かれている (Blackman 1924: Pl. 13)。ただし、男の上にあるヒエログリフの銘文の内容には、以下の 2 種類の解釈が可能と思われる。「ケルヘト容器 (?) のための粘土 (sin) を叩く」あるいは、「パン作りのために練り粉 (sin) を叩く」というものである。もし後者の解釈が正しければ、このメイルの墓のレリーフは、粘土の調整を描いたものではなく、パン焼きのための練った粉を叩きつけている場面を描いていることになる。まさに、このことが図像資料からだけで解釈する危険性を教えてくれているようである。「粘土塊」と「練り粉」とは見た目にも同様な形を呈し、言語上も区別することが困難なものであるからである (Holthoer 1977: 9)。

土器作りのための粘土を調整している確実な場面は、中王国時代以降に数多く描かれている。これらは土器生産工房の一隅で行われている作業として描かれていることから

確実なものとして捉えることができる。中王国第11王朝時代のバニー・ハサンのバケトIII世墓（Bakhet III：第15号墓）の場面（図1-1）には、2人の男が向き合って立ち、灰色をした粘土塊を踏んでいる。男たちの間には、「堆積粘土（ナイル・シルト粘土）を打つ」とヒエログリフでこの場面の説明文が記されている（Newberry 1893: Pl. 7）。同様の2人の男が向かい合って粘土を踏んでこねている場面は、同じくバニー・ハサンの第12王朝センウセレト1世時代（紀元前1955～1910年頃）のアメン・エム・ハト墓（Amen-em-hat：第2号墓）の土器生産工房の場面（図1-2）の中にも登場している（Newberry 1893: Pl. 11）。現在でもナイル・シルト粘土を調整する際には足で踏むことが行われている²⁾。

新王国第18王朝のテーベ西岸にあるケン・アメン（Qen-amen）の墓の壁画では、大きな泥（粘土）の塊の中に男が立って泥を踏む場面（図1-3）が描かれている（Davies 1930: Pl. 48, 59）。描かれた塊の大きさからナイル・シルト粘土に水を加えながら粘土を調整している様子が推定される。

このようにして足で踏まれた粘土塊は、今度は手で揉まれ回転台の上で調整されるのに適した大きさにされる。バケトIII世墓の粘土を踏んでこねている右側に描かれた図像で、男が屈んで手で粘土を揉んでいる様子が表現されている。男の頭上には、ヒエログリフで「塊に打つ（練る？）」と記されている（図2-1）。その右では円錐状に固められた粘土塊を回転台に運ぶ男の姿が描かれている。手で十分に揉んで水挽き調整ができるようにしたものである。同様な場面は、アメン・エム・ハト墓の中にも描かれており、粘土塊と見られる塊を両手に持って、回転台に座る陶工に差出している男の姿が登場している（図2-2）。

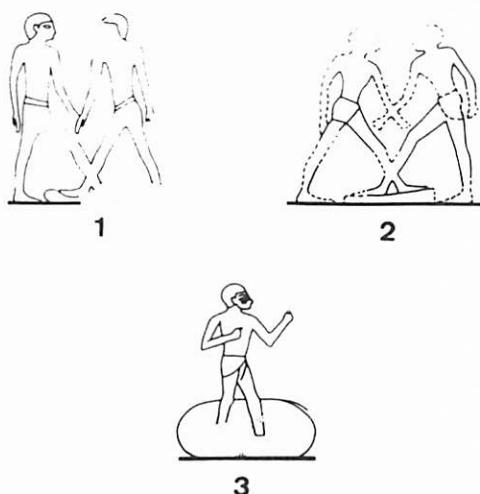


図1 足による粘土の調整（1-1 バケトIII世墓、1-2 アメン・エム・ハト墓、1-3 ケン・アメン墓）

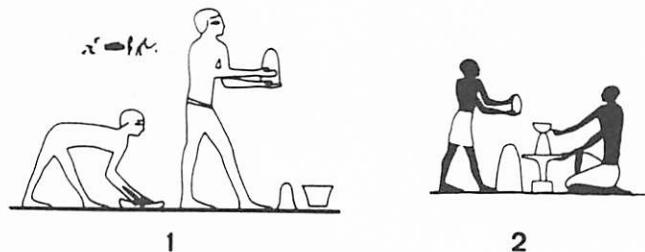


図2 手による粘土の調整（2-1 バケトIII世墓、2-2 アメン・エム・ハト墓）

手による器面の整形・磨研

ナイル川流域においては紀元前6150年頃のナブタ（Nabta）遺跡で最古の土器が出現するが（近藤 1997: 30-44）、土器の器形を成形する方法として「手捏ね」と呼ばれる手で直接的に作り出す方法が一般的であった。土器作りに際して手を使って土器の器面を調整する方法は、回転台が導入されてからも行われていた。

土器の内面及び外表面を整形したり、あるいは磨研したりすることを描いた図像もまた古王国時代から登場する。壺の内面に手を挿入して、器の内面を滑らかに仕上げる作業を行っている人物がしばしば描かれている。アル＝ギーザにある第5王朝のウニス（Unis）王時代（紀元前2315～2300年頃）のメヒ（Me hi）の墓のレリーフ（図3-1）には、座って壺に手を入れている男が描かれているが、男の頭上にはヒエログリフで説明文があり、「粘土を塗り付ける」と記されている。このことから、男は恐らく壺の内面の完全に乾燥していない粘土を指で撫で付けるようにして滑らかに調整していると考えられる（Holthoer 1977: 8-9）。

新王国第19王朝時代（紀元前1292～1185年頃）のテーベ西岸にあるデール・アル＝マディーナ（Deir al-Madina）出土のオストラコンには、子供（？）が手に小石を持って大型の壺の外表面を磨研している様子（図3-2）が描かれている（Brunner-Traut 1956: Pl. 20: 51）。小石を使用した器面調整は、極めて一般的な方法と考えられる。ナイル川流域の先王朝時代に数多く製作された赤色磨研土器（あるいはブラック・トップ赤色磨研土器）なども、半乾燥状態で小石を使用して強く器面に押しつけるようにして磨研していたのであろう。

回転台（手回し轆轤）による作業

西アジア地域においては、紀元前4千年紀のウバイト期に回転台の使用が開始されたと考えられている。ところがエジプトでは、先王朝時代のナイル・デルタのブト（Buto）で初期に一時的に回転台の使用が認められているが（Kohler 1998）、これは王朝時代に続く伝統ではなく、間もなく姿を消している。このことから、初期の回転台の使用を、

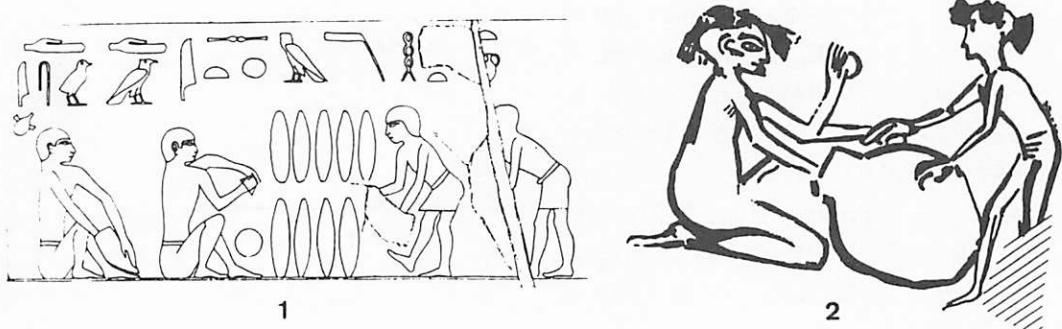


図3 手による器面の調整 (3-1 メヒ墓、3-2 デール・アル=マディーナ出土オストラコン)

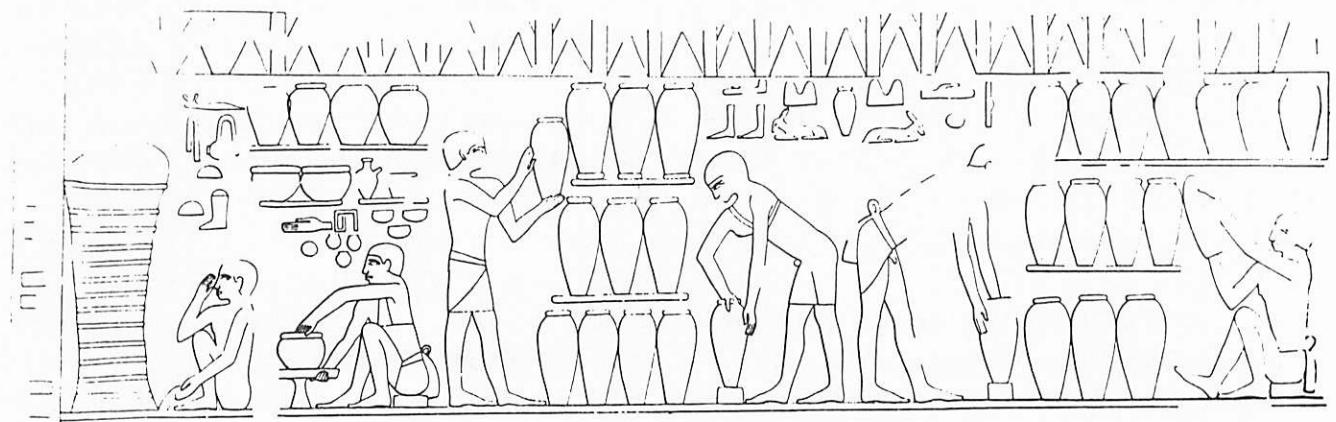


図4 ティイのマスタバ墓に描かれた土器生産工房の光景

西アジア地域から回転台を持った集団の一時的な流入として捉えることができるであろう。

本格的に、エジプトに回転台が導入されたのは、西アジア地域と比較して非常に遅れていると考えることが一般的である。一説には、初期王朝の第2王朝時代頃（紀元前2805～2655年頃）とされるが、確実な例としては、古王国第4あるいは第5王朝時代（紀元前2590～2300年頃）のアル=ギーザ（al-Giza）やサッカーラ（Saqqara）の墓内部に描かれたレリーフなどに登場するものが最古のものである。これらの中で第4王朝時代のネブ・エム・アケト（Neb-em-akhet）墓のものは、中央に位置する低い台を夾んで向かい合って座る2人の男を描いているものであるが、中央の台が回転台であることも、また男たちが台を使用して土器作りをしているとも残存する図像からでは決定することはできない（Holthoer 1977: 6）。

このようなことから、古代エジプトにおける最古で確実な回転台の使用を示す図像資料は、古王国第5王朝のニウセルラー王時代（紀元前2395～2365年頃）のサッカーラに残るティイ（Tiy）のマスタバ墓に描かれた彩色レリーフである（図4）。ここには土器作りの過程が細かく表現されている。向かって一番左側には土器の焼成窯の前に座る人物、

そして、その右側には手回し轆轤の上で土器を調整する人物が描かれている。男は片手で台を、もう一方の手で土器の口縁部をつまむ動作をしているように見える。中央に立って作業をしている男たちは、簡単な台の上に土器を置いて、土器を回しながら器面を整形しているようである。そして、一番右側の男が外面の調整を終えた土器の内部を整えている。

C. Hopeは、この図4の中央に描かれた器台のような台こそが土器を調整するための所謂「回転台」の役目をしており、こうした形状の台は、先王朝時代の土器の外面調整などから考えてナカーダII期（紀元前3300～3200年頃）にまで遡るのではないかとの説を提起している（Hope 1987: 13）。もしHopeの説が正しいのであれば、エジプトにおける回転台の導入は、前述の説とは大きく異なり約500年も古くなるのである。Hopeは、この台が木か石で作られたと推定しているが、J. Bourriauは、「油を塗った木製（?）」であると述べている（Bourriau 1981: 14-17）。ただし台の下に回転軸のあるタイプの回転台の導入は、西アジアよりも大きく遅れたようだ。これはナイル川流域における車輪の発達とともに大きいに関連があるようと思われる。

回転台と手回し轆轤の決定的な差違は、回転の速度にあ

る。回転台に十分な速度が加わらなければ、台の上で土器を調整することは不可能である。初期の手回し輶轆では、器の形状をある程度形作ったものを台に速度を与えて回転させながら整形（水挽き調整）していくのであろう。手回し輶轆と考えられる最古の図像資料も前掲のサッカーラのティイ墓のものである。

ティイ墓と同じサッカーラにある第6王朝テティ王の治世（紀元前2300～2285年頃）かその少し後の時代のケンティ・カ（Khenti-ka）のマスタバ墓のレリーフには、手回し輶轆の構造が良く示されている（James 1953: 69f, Pl. 42）。図像から判断して、一番下に前述したティイ墓の壺などの外面調整を行う際に使用しているのと同じ形をした台を置き、その上に回転軸と回転板を載せる構造をしていることが判る（図5-1）。

古王国時代を経て第一中間期から中王国時代になると手回し輶轆も速度の早いものが出現するようになる。中部エジプトのバニー・ハサンにある第11王朝から第12王朝時代にかけての岩窟墓には手回し輶轆を使用した土器製作の場面が多数登場する。第11王朝のバケトIII世墓には、背の低い手回し輶轆が描かれている（図5-2）。台の上に回転台を据える構造である。台は木や石、あるいは粘土で作られていたと考えられている。木や石の台の場合は、前述のJ. Bourriauが指摘しているように、油が塗られていたかもしれない。回転台も重量のある石製のものが使用されたと考えられる。

また同じく中部エジプトのアル=ペルシャにある第12王朝のセンウセレトII世からセンウセレトIII世時代（紀元前1870～1850年頃）のジェフティ・ヘテプII世（Dje huty-h etep II）墓のレリーフ（図5-3）には、分離することができる回転板を背の高い軸の上に置く構造の手回し輶轆が描かれている（Newberry 1984: Pls. 24-25）。輶轆の前に腰掛けた陶工は、左手で回転板に回転を与えながら、右手で土器の口縁部を掘んでいる。回転は反時計回りであり、左手を手前に引くようにして回転板に強い回転を与えていたようである。回転板は、木製の板が使用されたと考えられるが、輶轆の安定を高め速度を増すために、最下部の台や背

の高い軸は重量のある石で作られていたと思われる。

第1中間期から中王国時代にかけて墓に副葬された木製の土器工房を表現した模型には、手回し輶轆の前に座り、土器を作り出す陶工がしばしば表現されているが、これらの模型においては、全て陶工は左手で回転板を廻し、右手だけで土器を製作している。このように前述した陶工の手の動きに関しては、模型で確認することができる（Holthoer 1977: 10-11）。

新王国第18王朝のテーベ西岸にあるケン・アメン墓には、非常にユニークな手回し輶轆を使用した例が壁画で描かれている（図5-4）。背の低い手回し輶轆を挟んで2人の男が向合っている。向かって左の人物は陶工で三足の椅子に座り、大きな円筒状の粘土塊を両手で押さえている。一方、右側の男は跪いた姿勢で回転板を両手で持ち板に回転を与えている。中王国時代までの壁画等に描かれた輶轆を使用した土器製作においては、陶工は常に片手で輶轆に回転を与え続けなければならず、右手のみで器の形を調整していくかなければならなかつた（Hope 1987: 14-15）。

ところが、ここに紹介したケン・アメンの墓の例では、助手を使用して板に回転を与え続けることで、陶工が両手を使って水挽き調整をすることが初めて可能となつたのである。この例では、恐らく片手だけでは製作できない大型の容器のために、このような方法が考案されたのであろう。しかしながら、例え助手の力を借りたとしても、陶工が一人で粘土塊から水挽き調整をして土器を作るためには、回転台の速度は十分ではなかつたと想像される。

回転台（手回し輶轆）の上で成形された器は、粘土塊から切離される。中王国時代の図像資料では、回転を与えながら、指または籠を使用して切離したり、明らかに糸を使っていると思われる図像が存在している。糸を使用する所謂「糸切り」は、通常は輶轆の回転の速度を利用して行われるが、古代エジプトの手回し輶轆や回転台の場合は、回転の速度が遅かったために、停止した状態でも糸切りが行われたと見られる。

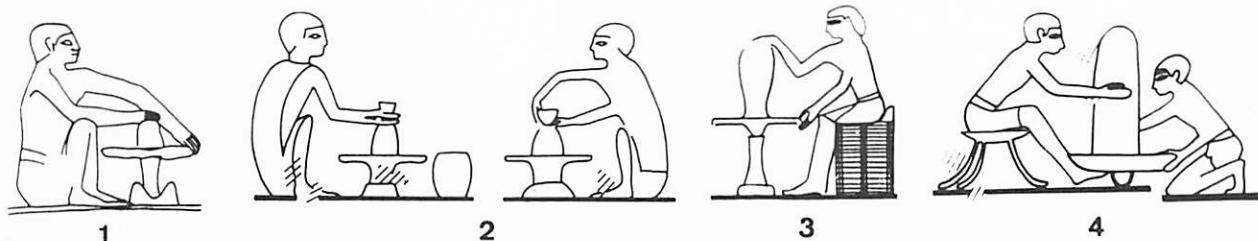


図5 手回し輶轆（回転台）（5-1 ケンティ・カ墓、5-2 バケトIII世墓、5-3 ジェフティ・ヘテプII世墓、5-4 ケン・アメン墓）

蹴り轆轤の使用

古代エジプトにおける蹴り轆轤の最古の例は、第1次ペルシア支配時代である第27王朝（紀元前525～401年）のカルガ・オアシス（Kharga Oasis）に位置するヒビス（El-Hibis）神殿のレリーフに描かれている（Davies 1953: Pl. 4, 73B、近藤1989b: 96）。時期的に見て西アジア方面から導入されたものと考えられる（図6-1）。人の姿で表されたクヌム神が、蹴り轆轤を使って土器を製作している場面が描かれている。右足で轆轤の回転板を手前に蹴っているよう見えるが定かではない。レリーフの脇には、ヒエログリフの銘文が記されており、以下のように書かれている。「クヌム、人間を形作るもの。」創造神でもあるクヌムは、新王国時代以降、回転台の上で人間を形作る牡羊の頭を持つ神として一般に知られている。

第27王朝時代に蹴り轆轤が導入されたものの、古代エジプトにおける土器生産には表面上は急速な変化を見ることはできない。おそらく蹴り轆轤がエジプト社会の中に普及していく速度は緩やかであったと想像することができる。その後、ブトレマイオス朝時代になると、土器の器形が多様化してくることから考えて、蹴り轆轤がかなり普及していったことを知ることができる。ブトレマイオス王朝時代からローマ支配時代にかけては、蹴り轆轤を使って製作された粗製の土器が大量に現れるようになり、社会の中の土器の消費も、それまでの時代とは比較にならない状況へ変化していく。

蹴り轆轤の図像は、ギリシア・ローマ時代の神殿のレリーフに多く登場する。それらの図像のほとんどは、牡羊の頭をしたクヌム神と関連するものである。ブトレマイオスVII世時代のエドフ（Edfu）のホルス神殿の誕生殿に描かれた

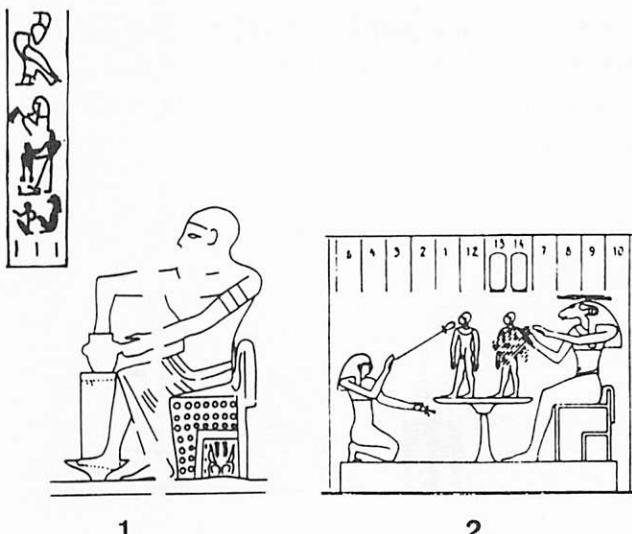


図6 蹴り轆轤 (6-1 カルガ・オアシス、ヒビス神殿、6-2 エドフ、ホルス神殿)

レリーフにも、羊頭のクヌム神が、蹴り轆轤の上で神と王のカーを作っている場面が描かれている（図6-2）（Chassinat 1910: Pl. 13）。

土器の乾燥と運搬

回転台の上で水挽き調整された土器は、その後、焼成前に乾燥される。乾燥が不十分であると、焼成時にヒビが入りして土器が上手く完成しないことがあるため、この工程は極めて重要である。壁画等で乾燥の場面を描いた図像は、ほとんど残されていないが、僅かにバケトIII世墓に描かれている。この墓の場合は、図像に添えられたヒエログリフの説明文「乾燥させる (s s w)」があるために、乾燥工程を表していると理解できるからである。また描かれた土器が灰色に塗られていることからも、焼成前の姿を表現したものであることが推定される。ここには、様々な器形の土器（鉢、注口土器、壺、器台等）が並べられているような図像が残っていても、それが乾燥を表現しているかどうかは文字による説明文がない限り決定することはできない（図7-1）。

一定期間、乾燥させた土器は、窯の中に納められた後に焼成される。焼成された土器は、窯から出され籠に詰められて担ぎ棒で倉庫など土器を一時的に収納する場所に運搬されるのである（図7-2）（Holthoer 1977: 10-11）。

焼成窯

土器生産を語る際に轆轤を使用した器の成形とともに、出来上がった容器を焼成するための窯の存在は重要である。土器の出現期やエジプト先王朝時代においては、焼成は「野焼き」と呼ばれる野外の開けた場所で窯を使用しないで焼成する方法が一般的であった。

第2急湍付近のヌビア（Nubia）のブーヘン（Buhen）の発掘でエマリー（Emery, W.）が報告している古王国第4王朝時代かそれよりも少し後の時代の窯が、考古学的に見て初期の窯の貴重な発掘例となっている（Emery: 117, Pl. 24）。居住区の南東に位置する、この窯は直径が1 mほどで背の高い円筒状を呈している。日干煉瓦で構築され泥漆喰

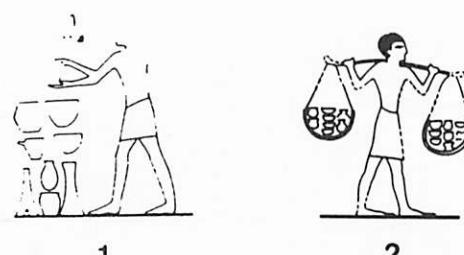


図7 土器の乾燥と運搬 (7-1 バケトIII世墓、7-2 アメン・エム・ハト墓)

で仕上げられている。窯の上部は開いた構造になっている。窯の傍らからマラカイト（孔雀石）が積まれた状況で発見されていることから、銅鉱石の精錬に使用された窯と見られる。しかしながら、壁画等に見られる窯も、このブーエンのものと良く似た構造を持っていることが判明している。

土器の焼成窯に関する図像資料の中で最古の例もまた、古王国第5王朝時代のサッカーラにあるティイのマスタバ墓に描かれた彩色レリーフである。古代エジプトにおける初期の土器生産を考える上で、このサッカーラにあるティイのマスタバ墓の土器工房を描いた彩色レリーフは、極めて重要な図像資料となっている。

ティイのレリーフに描かれた窯は、円筒形の構造を呈しており恐らく日干煉瓦で作られていたものと思われる。そして窯の上部が、やや外反しており粘土で塞がれている。焚き口は下部の右側にあり、男がその前に座り込んでいる。恐らく火がつけられている焼成時の状況を描いたものと思われ、男は右手を顔の前にして熱から顔を防護しているように見える。

同じく、古王国時代のサッカーラのプタハ・ヘテプII世 (*Pta h-hetep II*) のマスタバには、焼成窯を表すヒエログリフが記されている（図8-1）（Murray 1905: Pl. 8, 40）。古代エジプト語であるヒエログリフは、事物の形を的確に表現しているため、焼成窯の形態がどのようなものであったか考える上で非常に参考になる。窯自体は赤く塗られており、焚口と上部は黄色に塗彩されている。図8-1の向かって左にある窯には、左側に上下2つの入口が描かれている。下のものは焚口を示すが、上のものは焚口とは分離された換気口を表しているものと思われる。

第1中間期から中王国時代にかけての模型にも焼成窯が現れる。第10王朝か少し後の時代とされるサッカーラのカレネン (Karenen) の墓に副葬された土器工房を表す2基の模型には、円筒形の焼成窯が表現されている。窯は二つの

部分に分けられており、焚口と焼成室とが分離した構造を呈していたものと思われる (Holthoer 1977: 10)。中王国時代のバケトIII世（図8-2）やアメン・エム・ハト（図8-3）の墓に描かれた窯も円筒形をしており、窯の前では男が座り、片手を顔の前に覆う姿勢をとっている。この姿勢も前述のティイのレリーフのものと同じであり、焼成時の熱を遮る姿勢と考えられる。これら2基の墓では、焼成後に窯から焼き上がった土器を取り出す場面も描かれており、低い台に足をかけて窯の上部から土器を取り出す様子が表現されている。

中王国時代になると幾つかの遺跡で、土器工房址が発掘されている。ヌビアのミルギッサ (Mirgissa) では土器焼成窯が明らかになっている。矩形の窯と円筒形の窯の2種類の窯が検出されているが、矩形のものはパン焼きに使用されたと考えられている。一方、円筒形のものは径が240cmあり、焚口は南東に位置している (Holthoer 1977: 16, Vercoutter 1970: Figs. 23-24)。

図像資料から考えると、焼成窯の高さは中王国時代のものでも2m程度と推定されるが、新王国時代になるとケン・アメン墓に描かれた焼成窯のように、日干煉瓦で構築された窯の上部に達するために、何段もの階段が必要になるほど高さが増している。おそらく3m程の高さに達したと考えられる（図8-4）。

テーベの東カルナック (Karnak) でD. B. Redfordが発掘した末期王朝時代の窯の復元図が図9である (Redford: figure 1)。この形の焼成窯は、先が細くなるタイプであり、日干煉瓦で構築されている。焚口から火が込められ、窯の最下部が炉の働きを示している。そして上部に小さな穴が穿たれた土器を並べるための棚板状の仕切が作られ、穴を通して炎が土器を包み込むようにまわり、焼成される構造となっている。焼成時には、窯の上部は、一時的に蓋がされた。

C. Hopeは、こうした下部から単純に炎をまわす単純な

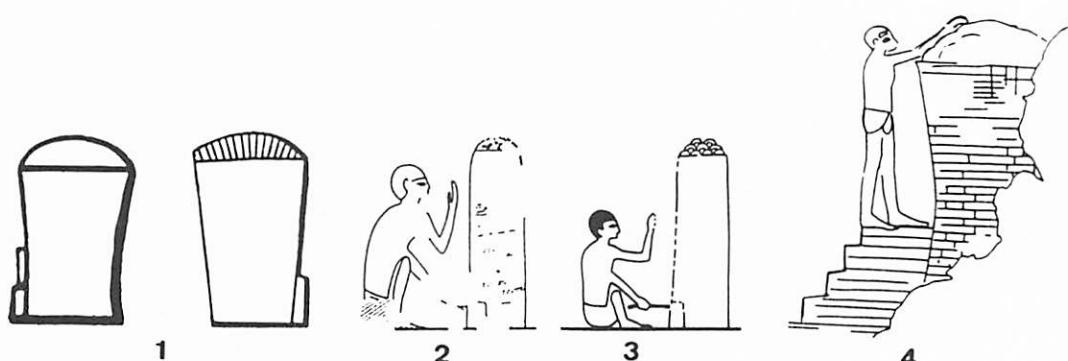


図8 土器焼成窯（8-1 プタハ・ヘテプII世墓、8-2 バケトIII世墓、8-3 アメン・エム・ハト墓、8-4 ケン・アメン墓）

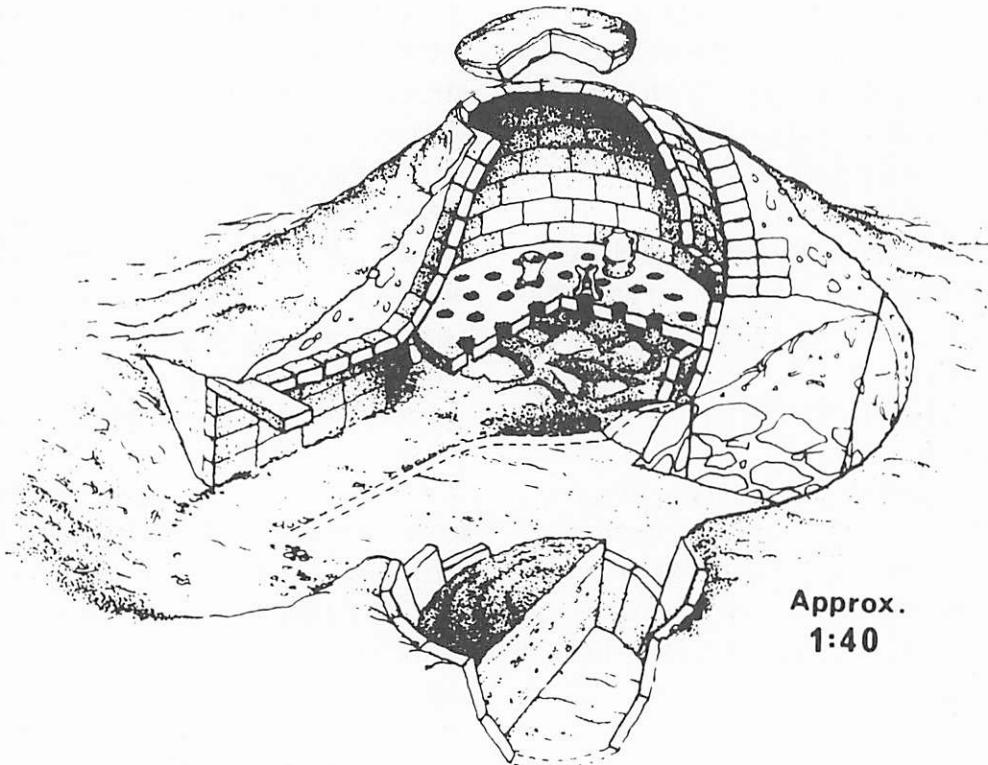


図9 東カルナクで検出された末期王朝時代の窯の復元図

構造の窯でも600°Cから1100°Cまでの温度をあげることが可能であったとしている。ナイル・シルト粘土では600°Cから900°Cで、一方、マール粘土でも700°Cから1100°Cで、土器の焼成には十分であることを考えると十分に実用にたえる構造であったことを示している (Hope 1987: 19)。

註

- 1) 本稿で使用する年代に関しては、主に J. von Beckerath の *Chronologie des pharaonischen Ägypten*, Mainz, 1997 の年代に準拠したが、一部多少の改変を加えている。
- 2) ルクソール西岸のアルニアカルタ (al-Aqalta) 村などの土器生産工房を訪問した時の観察による。

参考文献

- Blackman, A. M. 1924 *The Rock Tombs of Meir*, Vol. IV. London.
 Bourriau, J. 1981 *Umm el-Ga'ab. Pottery from the Nile Valley before the Arab Conquest*. Cambridge.
 Brunner-Traut, E. 1956 *Die Altagyptische Scherbenbilder (Bildostreka) der deutschen Museen und Sammlungen*, Wiesbaden.
 Chassinat, E. 1910 *Le Mammisi d'Edfou, Mémoires publiées par les membres de l'Institut Français d'Archéologie Orientale du Caire, Tome XI*. Cairo.
 Davies, N. de G. 1930 *The Tomb of Ken-amun at Thebes, The Metropolitan Museum of Art Egyptian Expedition*, Vol. V. New York.
 Davies, N. 1953 *The Temple of Hibis in Khargeh Oasis, Part III*. New York.
 Emery, W. B. *Preliminary Report on the Excavations at Buhen, Kush*, Vol. XI.
- Holthoer, R. 1977 *New Kingdom Pharaonic Sites : The Pottery, The Scandinavian Joint Expedition to Sudanese Nubia*, Vol. 5 : 1, Scandinavian University Books, 5-40.
 Hope, C. 1987 *Egyptian Pottery*, Shire Egyptology 5. London, p. 10.
 James, T. G. H. 1953 *The Mastaba of Khentika called Ikhekh*. EES, London.
 Kohler, E. Ch. 1998 *Tell Fara'in • Buto III. Die Keramik von der spaten Nagadakultur bis zum Alten Reich* (Schichten III-VI, Grabungen der Jahre 1987-1989), AV 94.
 Murray, M. 1905 *Saqqara Mastaba I*. London.
 Newberry, P. E. 1893 *Beni Hasan, Part I*. EEF, London.
 Newberry, P. E. 1894 *El Bersheh, Part I*. EEF, London.
 Redford, D. B. Son of Sun-Disc, Archaeological Newsletter Royal Ontario Museum, New Series, number 154.
 Vercoutter, J. 1970 *Mirgissa I*. Paris.
 近藤二郎 1989a 「文字資料から見た古代エジプトの土器」『古代中近東の土器—変遷とその背景—』中近東文化センター開館10周年記念展、中近東文化センター。
 近藤二郎 1989b 「ナイル川流域の土器の変遷」『古代中近東の土器—変遷とその背景—』中近東文化センター開館10周年記念展、中近東文化センター。
 近藤二郎 1997 「農耕・牧畜の開始と土器の出現」『エジプトの考古学(世界の考古学4)』同成社、30-44頁。

図版出典

- 図1：1 (Holthoer 1977: Fig. 42-3)、2 (ibid.: Fig. 42-4)、3 (ibid.: Fig. 42-5)、図2：1 (ibid.: Fig. 14)、2 (ibid.: Fig. 15)、図3：1 (ibid.: Fig. 6)、2 (ibid.: Fig. 26)、図4 (ibid.: Fig. 16)。

Fig. 4)、図 5 : 1 (ibid. : Fig. 44-4)、2 (ibid. : Fig. 47-2、3)、
3 (ibid. : Fig. 44-7)、4 (ibid. : Fig. 47-1)、図 6 : 1 (ibid. :
Fig. 32)、2 (ibid. : Fig. 33)、図 7 : 1 (ibid. : Fig. 14)、2 (ibid. :

Fig. 15)、図 8 : 1 (ibid. : Fig. 5)、2 (ibid. : Fig. 50-3)、3
(ibid. : 50-4)、4 (ibid. : 50-13)、図 9 (Hope 1987 : fig. 13)

近藤二郎
早稲田大学文学部
Jiro KONDO
Waseda University